

西暦(和暦)	年 齢	事 項
1841(天保12)年	0歳	籠橋定助の次男として生まれる。
1857(安政4)年	16歳	曾木村の大工職人佐吉に弟子入りする。
1859(安政6)年	18歳	兄定兵衛が急死したため本家を相続し、大工を断念。家業を手伝う。
1863(文久3)年	22歳	本家を弟数兵衛に譲り独立。
1870(明治3)年	29歳	妻木村門田の窯株を借り受け、窯焼きを始める。
1880(明治13)年	39歳	駄知村戸長に選ばれる。
1883(明治16)年	42歳	大阪、神戸に旅行し、陶磁器の市場調査を行う。
1886(明治19)年	45歳	赤井を考案。美濃陶磁業組合委員に選ばれる。
1891(明治24)年	50歳	陶磁器仲買商 𨔵商店を創設。多治見の陶器商分加藤庄六と赤井及び壺の一手販売契約を結ぶ。
1894(明治27)年	53歳	新窯及び工場を建設。
1896(明治29)年	55歳	多治見の本町に支店を開業。五二会岐阜陶磁器部長理事に選ばれる。
1904(明治37)年	63歳	休兵衛新道敷設。
1908(明治41)年	67歳	駄知に実業銀行を創設。電気事業を計画。
1910(明治43)年	69歳	美濃陶磁器同業組合長に選ばれる。
1911(明治44)年	70歳	白山神社に休兵衛の紀功碑が建設される。駄知鉄道計画。
1913(大正2)年	72歳	大正窯を築窯。
1921(大正10)年	80歳	10月13日死去。

	
<p>本稿の執筆にあたり、次の方々、関係機関からご協力、ご助言を頂きました。深く感謝の意を表します。</p> 多治見市図書館、東濃鉄道株式会社、岩井美和、河合竹彦、籠橋兵衛、籠橋利江（順不同）	

- 註

- ↑ 岐阜県 1895『岐阜県農商工報告第一号』（明治27年12月末調）によると創業は明治2年2月になっており、窯株との年代の違いが指摘されますが、その理由は不明です。
 - ↑ 窯数を制限するもので、寛政8年(1796)の窯株改めによると駄知の窯数は4基記載されています。
 - ↑ 明治5年8月に窯株制度が廃止されると、税金を納めれば誰でも自由に製陶業を行うことができるようになりました。
 - ↑ 嘉永2年(1849)窯焼減取調帳に記載されている多治見、瀧呂、笠原、下石、土岐津、小里、市之倉、高田の各窯屋の焼成回数を基に算出しています。このなかに駄知は含まれていませんが、幕末頃における土岐郡の窯屋の状況を比較的よく示しているため本史料を使用しました。多治見市 1976『多治見市史 窯業史料編』
 - ↑ 複数の個人が集まって仲間内で毎回一定の講金を集め、集まった金額を抽選や入札を行って貸し出したりする制度。

	
<div><div>主要参考文献</div><div><div>岐阜県土岐郡駄知町役場 1935『駄知町畧誌』</div><div>駄知鉄道株式会社 1938『駄知鉄道史』</div><div>塚本六兵衛 1955『駄知金融史』</div><div>塚本六兵衛 1957『籠橋休兵衛翁伝記』</div><div>岐阜県土岐市立駄知小学校郷土史研究会 1959『郷土駄知』</div><div>籠橋一族の百年編纂委員会 1977『美濃陶業外史-籠橋一族の百年-』</div><div>多治見市 1987『多治見市史 通史編下』</div><div>清水武 2005『東濃鉄道』</div></div></div>	

	
<p>編集・発行 公益財団法人土岐市文化振興事業団／土岐市美濃陶磁歴史館</p> 〒509-5142 岐阜県土岐市泉町久尻1263番地 TEL.0572-55-1245	

	
<p>土岐市美濃陶磁歴史館企画展</p> 土岐市における近代窯業の偉人Ⅲ 籠橋休兵衛 <p>2014年6月12日(木)～8月31日(日)</p>	

	
<p>はじめに</p> 籠橋休兵衛は、明治時代から大正時代に活躍した駄知町出身の人物です。天保12年(1841)、農業や水車業を営む籠橋定助の次男として生まれました。10歳頃から家業を手伝い、16歳で大工職人に弟子入り。18歳の時、兄定兵衛急死によって、一旦家業を継ぎました。しかし、22歳の時に家督を弟に譲り独立。製陶業、陶器商と事業を拡大し、経営者として成功する一方で、銀行や鉄道、発電所の建設など、駄知町の発展に尽力しました。 本展では籠橋家に残されていた資料をもとに、籠橋休兵衛の足跡をご紹介します。	

	
<p>1. 製陶家として</p> 22歳で独立後、農業を営んでいた休兵衛が製陶業を始めたのは、明治3年(1870) ^{*1} のことでした。当時、窯株制度 ^{*2} により窯株を持ったものしか製陶業を行えなかったため、妻木村門田の窯株を借り受ける形で、事業を始めます。その翌年にはこの窯株を買い取りますが、史料には加藤宇兵衛、加藤庄右衛門、中根慶十、籠橋数兵衛、籠橋久兵衛(休兵衛)の5人の共同窯であったことが記されています。当初は、旧来の業者からの抵抗があり、粘土が手に入らないこともあったようですが、休兵衛は自ら粘土の採掘を行い、この苦境を乗り切りました。 明治5年(1872)に窯株制度が廃止 ^{*3} されると、休兵衛、数兵衛、休左衛門、久作兄弟の共同窯となりました。この共同窯は不動洞に築かれ、焼成室が19間ある駄知で最大級の登窯であったそうです。残された資料から、𨔵の屋号もこの頃から使っています。明治21年(1888)の史料によれば、職工は9人で、駄知の平均3人と比べると、規模の大きい窯屋であったことが窺えます。休兵衛は年に12回ほど窯を焼きましたが、旧来は年3〜7回 ^{*4} でこれにより生産量を格段に増加させました。	

	
<p>大阪、神戸での市場調査</p> 𨔵は当初は紅皿を生産していましたが、その後、鉢や皿、壺、蓋物などを生産するようになります。メインの製品は鉢や皿で、手描きや摺絵、銅版で絵付けが施されています。中でも一番のヒット商品は「赤井」で、外面に錆釉を施し内面に文様を描いた井です。明治16年(1883)、休兵衛は大阪の陶器商との取引を見据えて、何軒かの店舗を視察し取引状況を調査しました。当時、大阪は神戸と共に、在留の中国商人が多数おり、これらの商人を通じて中国向け製品の出荷量が年々増加していた時期でした。休兵衛は、中国の中流家庭以下の日用品をターゲットに、中国製の手描きの赤井を、当時美濃で普及し始めていた摺絵の絵付け技法を用いて量産化を図ったようです。明治19年(1886)頃に開発された赤井は、明治24年(1891)以降に本格的に販売されました。当初は大阪の陶磁器商組合の総取締役であった横山政七に販売していましたが、その後、多治見の分商店の加藤庄六と5ヶ年に及ぶ一手販売契約を結び、赤井は分商店の手を経て、大阪経由で中国に大量出荷され、𨔵は更なる飛躍を遂げます。明治時代後期になると息子の久美(後の二代目休兵衛)に窯業生産の指揮を任せ、自分は販売業を主に行うようになります。その後大正時代には屋号を籠橋合名会社とし、昭和時代に入ると孫の産右衛門が経営する天がその生産の主体を担うようになりました。	

	
<p>休兵衛の赤井（明治時代中期）</p>	<p>中国の赤井（清時代）</p>

コラム1 井の元祖 ～塚本亀吉～

駄知町では「井」が町の特産品として知られています。安政2年(1855)の焼物売上帳に、土瓶とともに井が記載されていることから、この頃から駄知で井が作られていたことが分かります。

そして、駄知の井を世に広めた人物として塚本亀吉が挙げられます。亀吉は、駄知の北山にある窯屋、九平の次男として文政11年(1828)に生まれ、「亀吉井」を創始した人物として知られています。伊万里焼、あるいは湖東焼を研究し、安政年間(1854～1859)頃から亀吉井を焼き始めたといわれています。駄知では亀吉が成功を取ってから、井を生産するものが増え、その結果、井が特産品となっていきました。



染付花文鉢 (明治時代前期)



裏面 (焼物駄知亀吉大松上)

2. 陶器商として

休兵衛は製陶業を営む一方、陶磁器販売業にも商売を拡大します。販売業を始めた時期は、不明確ですが、明治21年の史料には販売業者としての記載がみられます。

明治24年には商業部の店舗を設け、商号を「冨商店」とします。この時に自家の製品に加え、中根豊兵衛ら3軒の窯屋から製品を仕入れ、販売するようになります。その後、仕入先を、曾木、下石、土岐津、定林寺、多治見、笠原、水上、大川などに広げ、駄知では兄弟の久作や数兵衛はもちろん、加藤徳兵衛、佐野助九郎など多くの窯屋と取引していたようです。

明治29年(1896)には加藤規一を常務として多治見の本町に支店を開業します。当時、東京や大阪などの商人が東濃に来る際には、多治見の旅館に落ち着くのが常であり、また多治見には多数の商人が店を構えており、商談が多治見でそのまま行われることが多かったことから、多治見支店の開業に踏み切ったといわれています。本店での営業は主に娘婿の留次郎が担当し、明治30年(1897)頃には関西、関東方面にも販路を広げています。主な取引先は、大阪では浅井竹五郎や辻惣兵衛、東京では加藤助三郎や大盛合資会社といった名前が当時の史料に残されています。この頃、日本における中国向け製



現在の冨商店

品の輸出量が飛躍的に増加していることから、明治36年(1903)には神戸に、明治40年(1907)には中国天津にも支店を出し、赤井や壺などの直接販売を行っています。明治41年(1908)には、本宅を本町通りに新築するのに伴い冨商店も新宅に商業部を、旧宅に工業部を置き、商業部は初代休兵衛と久次郎(後の三代目休兵衛)が、工業部は久美と産右衛門が受け持つようになります。その後、冨商店は、三代、四代休兵衛に引き継がれましたが、昭和40年代には廃業しています。

コラム2 専製権

明治19年、美濃で初めて「美濃陶磁業組合」が結成されます。当時、日本全体が深刻な不況下にあり、その対策の一つとして粗製濫造の防止が強求められていました。その方策として、組合による「専製権」の保障が始まりました。専製権とは、現代で言う意匠権のようなもので、品目、寸法、絵柄などを組合に届けると、同一類似品がなければ承認され、「陶磁器専製之證」が渡されました。専製権を取得すると、5年間は登録した品目の製造が保障され、無届で製造を行った者には罰則もありました。この専製権の保障によって、同一品目の粗製濫造をある程度防止することができたようです。この専製権は明治28年、岐阜県陶磁業組合が設立されると更に保護が徹底され、期間を10年に延長し、当時普及していた銅版には印刷紙を原品として寸法や図柄が5割以上異なるものに付与されました。休兵衛は駄知において最も多く登録しており、器種には井や皿等があります。また、主力商品である赤井も一手販売契約をしていた加藤庄六と連名で専製権を得ていることから、中国市場における同業者からの優位性を確保していたことが窺えます。

3. 休兵衛と公共事業

休兵衛は駄知において様々な公共事業を手掛け、多大な貢献をしています。中でも、銀行の創設、電気・鉄道の敷設は代表的な事業といえます。

まず、明治37年(1904)頃、休兵衛は銀行の創設を計画します。当時、駄知には銀行がなく、資金を借りる際には多治見の銀行や個人の資産家を頼らねばなりません。また、江戸時代から続く頼母子講^{*5}と呼ばれる組織もありましたが、不況時には多くの借主が借金を返済しないことが頻発しました。期待された銀行の創設でしたが、資本金の問題で話は一時頓挫。その後、明治41年になり東京の陶磁器仲買商加藤石松が経営していた株式会社実業銀行を買い取る形で、駄知で初めての銀行が営業を始めます。その際の主要メンバーには籠橋久作、加藤作次郎、正村鍍次、加藤敬一、白石伸七、塚本亨二、水野喜平らがあり、休兵衛はその中で銀行創立代表人に選ばれ、設立メンバーの中で最も多い株金を引き受けています。支店及び代理店を下石、稲津、柿野に設置し、大正9年(1920)には資本金を増資して益々発展していきますが、大正末年以降、小規模銀行の統合政策により昭和5年(1930)に一切の営業権を明治銀行に譲渡しました。

電気と鉄道の敷設は、製陶業の発展に欠かせない重要な事業でした。電気事業が初めて計画されたのは明治41年、駄知村を流れる肥田川を利用するもので、村内だけの流域では水流が弱く肥田村の木股光貞と共同で国に申請をしますが、既に多治見の加藤喜平が土岐川流域と肥田川流域における権利を得ていたため申請は却下されました。このため、村営の電気事業に切り替えて議会の上を承認し、明治44年(1911)に電気事業経営認可申請書を提出し、翌年にその認可が下りています。大正元年(1912)に丸山地区で第一発電所の工事に着手し、翌年完成、大正8年(1919)に地京平に第二発電所の工事に着手し翌9年に完成します。長らく村内の電灯や工場などの動力に供給されていましたが、昭和時代になると、設備も旧式で能率も下がったため、昭和18年中部電力株式会社に吸収され施設も取り壊されました。

鉄道計画は窯業原料及び陶磁器製品の大量輸送を目的とするもので、明治30年の中央線建設の際に誘致するも失敗。その後、明治44年籠橋休兵衛を中心に、加藤作次郎、白石伸七、塚本亨二、加藤敬一、籠橋留次郎などのメンバーらが、駄知―瑞浪ルートの電気軌道施設特許願を政府に申請しましたが、建設資金不足を理由に却下されています。大正5年に駄知軽便鉄道株式会社を設立し上述したルートで再度駄知鉄道施設の出願を行いました。瑞浪側の有力協力者であった近藤奇文の急死により、駄知―下石―土岐津ルートへの変更を余儀なくされました。その後大正8年に駄知鉄道の工事認可が下り、大正11年(1922)には下石駅まで、翌年には駄知駅まで、翌々年には全線開通しました。昭和19年(1944)には、笠原鉄道とその他6社が合併して東濃鉄道株式会社が設立され、東濃鉄道駄知線として存続しましたが、昭和47年(1972)の集中豪雨によって土岐川の鉄橋が流失し、昭和49年(1974)廃線となりました。



駄知機関区 (所蔵：東濃鉄道)

おわりに

休兵衛の生涯は、常に挑戦に満ちていました。既成概念に囚われない彼のやり方は、批判を受けることもありましたが、それを乗り越える強い精神力を持った人物でした。己の利益だけを目指さず、駄知のために尽力した休兵衛の長年の功績を称え、明治44年(1911)に紀功碑の建設が計画されます。紀功碑の作成には、近在の商工や政財界はもちろんのこと、取引先であった東京、大阪、神戸、北海道の関係者から寄付金が寄せられました。紀功碑は白山神社に置かれ、除幕式当日は郡内の有力者を含む約300人が出席しました。存命中に紀功碑が建てられることは稀であり、いかに休兵衛の功績が多大なものであったかが窺われます。

その10年後、休兵衛は念願であった駄知線の開通を見ることなく、大正10年10月13日に80年の生涯を閉じます。人に迷惑をかけることを厭った休兵衛は、死ぬ前に自らの借金を全て返済させたということです。この休兵衛の質実剛健な気質が経営の礎となり、冨は四代続くこととなります。(中 嶋 茂)